

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成24年 6月1日現在

機関番号：14303

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2011

課題番号：23652108

研究課題名（和文） 学術英語テキストの分析を英語論文ライティングサポートに繋げる研究システム整備

研究課題名（英文） Creating a Research Program of Textual Analysis of Academic English for Supporting Academic Writing

研究代表者

崎村 耕二 (SAKIMURA KOJI)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授

研究者番号：50162326

研究成果の概要（和文）：

若手研究者 320 名に対するアンケート調査等によって主に次の 3 点が明らかとなり、事態改善のためのいくつかの方策を考察した。1. 研究成果を英語論文にまとめ国際的ジャーナル等に発表する必要性は極めて強く認識されている。2. 教育的なサポートを受けながらライティング技能を充実させることよりも英文添削の専門業者等を利用して原稿の質を向上させる等、成果物自体の質の向上に努力が向けられる傾向がある。3. 経費面を含めた組織的なサポートが得られないまま、外国語に関わる周辺の負担を個人で抱え込んでいる実態が存在する。

研究成果の概要（英文）：

Our survey of 320 junior researchers indicates (1) that they are keenly aware of the need of getting their research results published in English in international journals etc.; (2) that instead of trying to retrain themselves attending educational programs (of writing academic papers etc.), they tend to apply their efforts to improving the quality of their products by obtaining external help from, for example, agencies specializing in English for academic purposes; and (3) that the lack of organized support (including finances) within their institutions may leave them overloaded with peripheral activities of coping with a foreign language. Based on these findings, some suggestions for improvement were considered.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：テキスト分析

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：学術英語，論文テキスト，研究者支援

1. 研究開始当初の背景

我が国の学術研究は世界的指標に照らし、自然科学・テクノロジー、人文社会科学の多くの分野できわめて高い水準にあることは論を待たない。しかし、各専門分野において優れた研究成果を上げていても、英語による論文作成と国際的ジャーナルへの投稿という専門外のハードルが待ち受けている。独立した研究者は、すでに大学院において専門教育を修了しており、研究者として自立するための周地的基礎技能も習得しているはずであ

るが、高度な学術研究にもとめられる英語のライティングを中心とした技能の習得はきわめて不十分である。そもそも大学院において十分な教育プログラムが提供されていないのが実態である。不十分な態勢のまま独り立ちすることになる。一刻も早い成果の発表に迫られた一部の研究者は、限られた研究予算を賄いながら、民間の翻訳サービス会社や英文添削業者から有料（きわめて高額）のサービスを受けることで辛うじてその困難を克服しているように見える。この方面での研

研究者に対する組織的・機動的支援態勢も脆弱である。海外の研究者たち(つまり、同分野で競合関係にある海外の英語母語話者の研究者たち、アメリカ合衆国、イギリス、オーストラリア、カナダ、その他インド、シンガポール等、英語を母語あるいは第二言語として通常業務を行っている研究者たち)と比べて、我が国における日本語話者の研究者たち、特に若手研究者たちが抱えるハンディは経費面や時間面にとどまらず、日常的研究態勢において専門研究への集中化を一時的に疎外する要因にもなりかねない状況である。限られた研究予算を使って専門研究をかるうじて賄っている若手研究者は、英語論文作成支援のための潤沢な翻訳経費は高根の花である。英語のライティングという学術的に重要な側面だけでなく、英語による口頭発表、研究者交流等の面でも困難はつきまとう。このような情況に照らして、研究者が英語に関わる側面でのサポート態勢の整備・充実が求められている。

2. 研究の目的

日本の若手研究者(大学院研究科博士後期課程在籍者含む)のための英語サポート態勢はいかにあるべきかを検討する。特に英語による研究成果の発表(国際的ジャーナルへの投稿、学会発表等)のための基礎体力および高度な英語表現能力を獲得するために若手研究者はどのようなサポートを必要としているかを調査し、その支援体制のプランを考案する。また、それを実体化させるための活動(研究者間の協力体制づくり等)の試みを行う。具体的には、アンケート調査や研究会・学習会等の開催を通して若手研究者が抱える英語ライティング等をめぐる種々の問題の実態を把握し、その解決のために必要な学術英語の知の蓄積を行い、そのことで「日本の研究者のための英語」という新規な分野を展開する。

3. 研究の方法

次の(1)(2)の方法により若手研究者たちが置かれた状況を調査し、(3)により現実的な手立てを考察した。

(1) 日本国内の大学で英語のライティング支援に係る教育設備を運営している大学について調査した。熊本大学大学教育機能開発総合研究センターライティング指導室、東京大学 ALESS プログラムを訪問調査、また、第4回ライティング・センター研究会(政策研究大学院大学)への参加等により、学部・大学院における学術目的でのライティング支援の実態について情報を収集した。

(2) 主に京都大学大学院に所属する若手の

研究者へアンケート調査を行うことによって学術目的での英語の必要性、研究現場における英語への意識、困難への取り組みの実態と解決法、等を調査した。アンケート調査の概要は次の通りである。

【名称】「日本の研究者と英語の必要性」
-----日本の高等教育研究機関における英語サポートプログラム構築のために

【目的】英語論文の作成や、英語による口頭発表・討論等、学術目的の英語の運用にあたって、日本の研究者たちが直面している状況や問題を調査し、支援のための方策を探る。

【方法】質問項目への回答、自由記述等による。

【対象】京都大学大学院の研究科に所属しているすべての若手研究者(助教、講師、准教授等の研究教育職に就き、独立して研究活動を行っている自然科学・社会科学・人文科学の諸分野の学術研究者を対象とする。その第1言語が日本語であることを想定する。)

【期間】平成23年9月下旬より約1か月の期間。

【回答要領】選択肢からふさわしい番号を選んでもらった。選択肢にふさわしいものがない場合には、「その他」を選び、空欄に記入を依頼した。

【発送数】1227名。

【回答者数】320名。

【設問の構成】何を問題にしてどのような表現で質問を投げかけたかだけを下に示す(個々の設問の選択肢は省く。)主な主題を見出して示し、各設問にはA~Uの通し記号を付けた。

《研究上の英語の使用状況と重要性について》

- A. あなた自身の研究環境・研究活動において英語はどのように使用されていますか。
- B. 研究成果を英語で論文にまとめ発表することは、あなたにとってどれほど重要ですか。
(1. 0% 2. 25% 3. 50% 4. 75% 5. 100%)
- C. 上記Bで「1(0%)」または「2(25%)」を選んだ方にお尋ねします。その理由は何ですか。
- D. 上記Bで「4(75%)」または「5(100%)」を選んだ方にお尋ねします。その理由は何ですか。

《あなたが受けた教育について》

- E. 大学院レベルで、英語が使える研究者を養成する教育プログラムを提供されたことがありますか。(教育科目を受講した、講習会に参加した、等)
- F. 上記Eで「ある」を選んだ方にお尋ねします。それはどのような内容でしたか。
- G. 上記Eで「ある」、「ない」いずれを選んだ方もお答え下さい。あなた自身が今教育または訓練を必要としているとするならば、ど

のような内容ですか。

《英語使用の諸問題について》

H. 英語で苦労した経験、あるいは現在苦労していることについて、お尋ねします。学術目的でのリスニング、リーディング、スピーキング、ライティング、ソーシャライジング、文法的側面、の観点からご回答ください。

《ライティングの添削について》

I. 今までに、英語論文作成などにあって他者に添削を依頼したことがありますか。

J. 上記 I で「1. ある」と回答した方にお尋ねします。ライティングの添削を誰に依頼あるいは委託しましたか。

K. 上記 I で「1. ある」と回答した方にお尋ねします。依頼あるいは委託した経験に照らしてご回答ください。添削をどの程度受け入れましたか。

L. 上記 K で「1. すべて、あるいはほとんど受け入れた」または「2. かなり受け入れた」と回答した方にお尋ねします。添削のおかげで学会誌等にアクセプトされるレベルに達したと考えますか。

M. 上記 J で 2, 3, 4, 5 のいずれかを回答した方にお尋ねします。添削を依頼した際に、謝金などのお礼をしましたか。差し支えない範囲でご回答ください。

《翻訳・添削の専門業者について》

N. 上記 J で「1. 専門業者」と回答した方にお尋ねします。次のケースのいずれですか。

1. 日本語で書いた論文を丸投げして英語に翻訳してもらった。2. 自分で書いた英文を添削してもらった。3. 回答できない。4. その他（次の空欄にご記入ください）

O. 上記 J で「1. 専門業者」と回答した方にお尋ねします。翻訳または添削サービスに関してどのようなことを感じましたか。a. 料金について b. 納入までの時間について c. 納入までの添削のプロセスについて d. 委託したサービスの満足度について e. 差し支えなければ、業者から受けたサービスについて具体的にご記入下さい。（添削方法、業務の質、業者名等）

P. 上記 I の「今までに、英語論文作成などにあって他者に添削を依頼したことがありますか」の質問について、「ある」、「ない」いずれを選んだ方にもお尋ねします。添削依頼について考えていることがあれば自由にご記入ください。

《英語支援ツール等について》

Q. 近年、コンピュータによる英語支援ツール（語法データベース、コーパス、論文作成支援ソフト、ワープロの文法文体チェッカー機能等*）が身近になってきました。このようなツールのいずれかを使ったことがありますか（スペルチェック機能は除く）。

R. これまで使ってみて便利だと思った英語支援ツールや、このようなものがあつたら良

いと思うツール等について、自由にご記入ください。

S. 日本国内で、英語ライティング添削等の相談に応じるセンター等を学内に設置している大学が複数存在します。これらは主に、学生のレポート作成支援を目的としており、かならずしも研究者向けの論文作成、口頭発表、研究者交流のような学術研究目的の英語支援設備ではありません。このような設備あるいはプログラム（ワークショップ、セミナー等）について、ご意見等ございましたら自由にご記入ください。

T. 本調査プロジェクトでは、ワークショップ、セミナー等の企画を検討しています。ご希望の内容を選択してください。

U. 研究者の立場から、英語についてのご見解、ご感想、体験談等がございましたらご記入ください。

(3) 「研究者のための英語」と題する学術英語研究会（平成 24 年 3 月 20 日、キャンパスプラザ京都）を開催した。崎村耕二による「研究者はどのようなサポートを求めているか」と題する発表、さらに「英語論文を仕上げるために——英文添削・校正のありかたを専門業者に聞く」と題するパネルディスカッションを行った。英文添削の大手専門業者より講師（Editage 湯浅誠、Enago 古屋裕子）を招聘し、学術研究者への添削サービスの内容・実態についての発表を聴いた。またフロアとの意見交換を行い、英語論文の仕上げの段階で専門業者が関与することの利点と今後の展望を考察した。

4. 研究成果

(1) 主にアンケート調査により、次のような実態を確認することができた。（アンケートの設問は、ライティング、プレゼンテーション、リーディング、リスニング、ソーシャライジング等、多岐にわたったが、ここでは主にライティングを取り上げる。）

① 研究成果を英語論文にまとめ国際的ジャーナルに投稿する必要性は極めて高い、という認識は共有されており、その現実的要請に応じるべく日々努力している。研究成果を英語論文にまとめて発表することの重要度は、100%とする回答が 174 名、75%と合わせれば 258 名に上った。ただし、すでに教育課程を修了している独立した研究者においては、教育的なサポートを受けながらライティング技能を充実させることよりも、英文添削の専門業者等を利用して原稿の質を向上させる等、成果物自体の質の向上に努力が向けられる傾向がある。

② 回答者の9割以上が現実に専門業者を利用したことがある、と答えており、一部にはかなり頻繁に利用している実態が明らかとなった。専門業者への依頼にあたって、日本語で書いた原稿を丸投げして翻訳依頼したという回答はわずか9名にとどまり、223名が自分で書いた英文を添削してもらった、と回答している。高度な研究水準を保つ大学において研究者自身が一定の英語ライティング技能を習得していることがうかがえる。利用する業者については国内外の多数の業者(実名の回答による)を利用しているが、その多くは大手の数社であることがわかった。約半数の回答者が、添削サービスを受けることにより学術誌にアクセプトされるレベルまでライティングの質が上がった、と認識している。また納期・料金についての満足度も高かった(「納期は適切だった」が207名で約65%、「料金は適切だった」が148名で約46%)。上記「研究開始当初の背景」でも述べたように、研究成果の発表手段である英語論文作成という作業のために、研究者が過度の負担を背負い、そのため専門の研究に充てるべき時間と労力がそがれることを考えれば、経済的負担は生ずるものの、専門の添削業者に外注することは重要な選択肢であることがうかがえる。ただ他方で、依頼した業者の添削結果に不満を表明する回答も見られ(10名)、ライティングの質を向上させるという目的が真の意味で実現されているかどうか若干疑問も残った。

③ また、添削結果に関する設問で、「満足できた」123名に対して、「どちらとも言えない」91名が存在することは看過できない。添削された原稿を自ら確認・納得できているかどうか不明である。添削結果をどの程度受け入れたかという設問に対して「すべてあるいはほとんど受け入れた」が110名であることと併せて、添削結果の評価にあたって依頼者自身の判断力がどの程度働いているかについて疑問が残る。独立した研究者であるとともに自立した英文の書き手であることはあくまで理想である。そこで添削サービスの必要性が痛感されるころではあるが、依頼にあたっても研究者の判断を支えるようなサポートも必要ではないか、と考えられる。

(2) アンケート調査の中心部分(特にライティングに関わる設問)を踏まえ、日本の研究者に対してどのようなサポート提供があり得るかを検討した。アンケートのQ, R, S, T, Uの設問を中心に、また平成24年3月20日の研究会での意見交換の中で提起された問題等を取り入れながら下記にまとめる。

① 自分が書いた英文原稿の添削を専門業

者に依頼する、という方向でのライティング支援は現実的に大きな役割を演じていることがわかるが、他にもサポートのプランを考察した。アンケートでは、語法データベース、コーパス、論文作成支援ソフト、ワープロの文法文体チェッカー機能等が普及しつつあることを踏まえ、自立した英語の書き手を支える、という意味での英語支援ツールについて尋ねた。「このようなツールのいずれかを使ったことがありますか」という問いに対して意外にも「よく使っている」が77名、「時々使っている」が51名にとどまり、「使ったことはないが、聞いたことはある」が114名で約36%に上った。これらのツールの活用は、英文原稿の質を多かれ少なかれ向上させることは明らかであるが、あまり利用されていないという実態は意外であった。この方面での情報提供サポートも必要であろう。ライティング支援ツールはかならずしもライティングのみではなく、英語という言葉の使用に関する基本的な理解や技能の習得を助けてくれる総合的ツールとして利用することができる。プレゼンテーションの原稿作成やディスカッションの準備にあたって、英語を組み立てる基礎となる文法・語彙・表現を検索したり、草稿のチェックをするためにも活用できるのである。例えば冠詞や前置詞の用法などの文法的側面は、ライティングだけでなくスピーキングの場面でも重要な役割を演じる。英語の困難な側面を問う設問(設問H)で、文法的な側面、特に「冠詞」「前置詞」「数」「助動詞」の使い方について困難を覚える回答が多く、冠詞は筆頭の256名、それに続く前置詞は166名であったが、これらの文法事項について、その基本的な用法は高校卒業までに理解できているはずであるが、実際の運用となると多くの困難があり、習熟までには相応の勉強をしなければならない。しかしまさら英文法の授業を受けることは考えられないだろう。その点、上記の支援ツールはかなりの困難を軽減してくれる。その意味でも利用を促進する態勢が望まれる。

② 次に、研究者向け講習会等の企画案についても問いかけた(ライティングだけでなくプレゼンテーション等、学術英語に係る技能全般を含む)。「英語論文作成セミナー」を希望する回答は99名と意外に少なかった。論文作成技能は困難は伴うにしても特にあらためて教育を受けるにはおよばないという意識があることと、(すでに指摘したように)訓練を受けるよりは生産物(=論文)の質を上げる、という方向に努力が向けられているためでもあろう。回答で一番多かったのは、「英語による口頭発表および討論技法セミナー」であった(140名)。他の設問に対する記述回答にもみられる通り、この方面で苦勞

しているという声が聞かれた。記述回答では「突っ込んだ議論が要求される場面においては、しばしばネイティブスピーカーとの違いを感じる」「残念ながら英語ができないと国際学会の場では全く相手にされない」等の指摘があった。特別な訓練を受けない限り、日本の大学において日常的な研究活動の場面でこの方面の技能を培う機会は少ないのである。学術英語という観点では、研究者に対するライティング・サポートがもっともオーソドックスなものであろうが、プレゼンテーション・ディスカッション、さらにはソーシャライジング等、発話や交流に係る方面のサポートも求められていることがわかった。

③ 研究者たちが直面している困難を解決する方策については、本研究が視野に置いているサポートプログラム（研究者向けワークショップ等）に期待する声も聞かれる一方、この方面の能力は、教育プログラムよりも、実地の経験を積み重ねる（あるいは「場数を踏む」）ことにより獲得される、という認識も記述回答の中にいくつか表明されており、この点を含めたサポートプログラムの検討が重要であると考えられる。各大学で、大学院生対象の教育プログラムが提供されている事例をいくつか調査したが（京都大学、大阪市立大学等）、あくまでこれらは学生向けの教育プログラムであり、履修+単位認定という手続きに基づく。若手研究者向けあるいは大学院博士後期課程レベルでは、「研究室」という組織単位が、一定の目的に応じて機能的に運営されているならば、もっとも望ましい場所となるであろう。つまり教育プログラムという客観的に確認できる正規の教育プロセスとは別に、「研究室」における研究活動の中に参加あるいは身を置くことによって培われるものに注目したい。

④ 経費を含めた組織的なサポートが得られないまま、論文作成準備を巡る大きな負担を若手研究者個人が抱え込んでいる実態は、アンケート調査の記述回答で表明された。経費面の補助がほしい、学内業務で忙殺されており研究そのものがままならない、英語どころではない、という声にも耳を傾けたい。また研究会においてフロアから出された声として、大学院に学籍を置く立場では、まだ研究者としてはみなされておらず、学生から研究者へいたる過渡期の段階での（例えば英文添削の）サポートが受けられない、という不満も表明された。各大学における今後の大きな、そして切迫した課題であろう。特に研究機関が組織的に、特に経費面でサポートしていくことが求められる。

(3) 本研究で行ったアンケート調査、研究

グループ内での討論、学術英語研究会の開催等により、次のような企画を進める態勢が整った。

① 英文添削のありかたそのものに関する研究の可能性を探る。特に、添削結果に関する研究者自身の判断力を身につけ、添削業者の添削プロセスを精査しながら英文作成作業を総合的に進めるための方策を探る。

② 学術目的に対応したライティング支援ツールの開発・利用について調査を進め、一定の段階で講習会等を行う（平成24年6月9日学習会開催予定）。

③ アンケート調査で判明した「英語の困難な側面」から重要な項目を抽出し、学習会等で取り上げる。特に、英語の基本的学習事項でありかつ学術英語全般においても重要な役割を持つトピックを英語学の所見を踏まえながら学習する。具体的には、冠詞、助動詞、前置詞、数、などである。あわせて学習会の成果を「研究者のための英語 Q&A」の形でデータベース化し公開する。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計1件）

①河野亘、深田智、崎村耕二「日本の研究者と英語の必要性」学術英語研究会、2012年3月20日、キャンパスプラザ京都

〔その他〕

ホームページ等

学術英語研究会 <http://j-ser.org/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

崎村 耕二 (SAKIMURA KOJI)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授
研究者番号：50162326

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

深田 智 (FUKADA CHIE)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・准教授

研究者番号：70340891

(4) 研究協力者

河野 亘 (KONO WATARU)

京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程・院生